

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
2020年12月12日
文責：JUN

個別最適な学びと協働的な学びの往還ということ

2020年(令和2年)は、新型コロナウイルス感染症によって世界が震撼させられた一年でした。命の危機にさらされただけでなく、その命の危機ゆえに社会生活が一変しました。そのことによる影響は多くの人を苦しめ、第3波による感染者増と医療危機に陥りつつある今、不安と混乱がますます強くなっています。

多くの子どもが集う学校は、どのようにして感染を防ぐかという対策に多大なエネルギーを注ぐことになりました。そのため、学校における過ごし方でいろいろな対策を立てることになったのですが、教師にとってもっともつらいことは、授業のあり方にまで制限を加えなければならなかったことでした。それでも、全国の教師たちは、自らの感染防止を徹底して実践しながら、子どもの健康を守り、学びを守るため、細心の注意を払ってきました。それは大変な努力の日々だったでしょう。

1 「個別最適」ということ

コロナ禍は、たくさんの変化をもたらしました。その変化の一つに、デジタル化の加速ということがあげられます。対面回避という制限が生まれる中、それに代わるものとしてオンライン化が急速に広がりました。テレワークが推奨され、ZOOM会議がさまざまところで行われ、さまざまな業界における消費者とのやりとりにも拡大しました。そして、それは、学校教育においても、オンライン授業などで大きな力を発揮することとなりました。こうして、コロナ禍以前に策定されていた、子ども1人1台タブレットというGIGAスクール構想が前倒しで実現することになったのでした。

タブレット配備はハード面での措置であり、それだけでは効果は出ません。機器をどう活用するかというソフト面の対策が不可欠です。それが、文科省から公表された「令和の日本型学校教育の構築を目指して」という中教審初等中等教育分科会の中間まとめ(10月7日)ではないでしょうか。そこに出された「個別最適」という文言が、今、注目されています。

このことについて、萩生田文科大臣は、12月9日に発したメッセージで次のように述べています。

—— 1人1台端末環境は、もはや令和の時代における学校の「スタンダード」であり、特別なことではありません。これまでの我が国の150年に及ぶ教育実践の蓄積の上に、最先端のICT教育を取り入れ、これまでの実践とICTとのベストミックスを図っていくことにより、これからの学校教育は劇的に変わります。／この新たな教育の技術革新は、多様な子供たちを誰一人取り残すことのない公正に個別最適化された学びや創造性をはぐくむ学びにも寄与するものであり、特別な支援を必要とする子供たちの可能性も大きく広げるものです。——

大臣が述べている「多様な子供たちを誰一人取り残すことのない公正」な教育に寄与することについては、本当にそうありたいと思います。公教育が求められているのは、まさに「すべての子

どもの学びの保障」なのですから。それを「1人1台端末環境とこれまでの実践とのベストミックス」で行おうというのです。

「個別最適化」という文言もそうですが、教育の世界には（教育だけではありませんが）、こういった、一つの施策、一つの考え方、一つの方策を表す、象徴的な文言がよく出されます。私は、耳障りのよい文言に出会ったときはまず警戒します。耳障りのよさにごまかされず、それはどういうことなのか、本当にそうなのかを考えるようにするのです。そうしないと、よく知らないうちになんとなくそれらしいことを行ってしまい本質的なことを見失ってしまうことになるからです。

1人1台端末環境でイメージするのは、子ども一人ひとりが個別に端末機器に向き合っている姿です。そういう意味では「個別」ということについてはそうなるにちがいません。ここで一つ疑問が生まれます。それは、一人ひとり個別に学ぶことは本当によいことだろうかということです。学びは一人ひとり個別に生まれます。私たちが目指しているのは、すべての子どもの学びの保障です。ですから、一人ひとりの学びを大切にするのは教師として当然のことです。しかし、学び方として「個別化」することが本当によいのかということとは区別して考えなければなりません。

1人1台端末で学ばせることで最もよいことは公平性が生まれる可能性が高まることです。どの子どもも同じように1台の端末に向き合えるのです。しかも、その端末を操作することによって生まれた状況、それはその課題に対する考えであったり、疑問であったり、発見であったりといったものや、逆に、わからなくて困っている状況まで、授業を進める教師に公平に届きます。それは、教師のすべての子どもの状況把握を可能にし、間違いやわからなさや瞬間的に生まれる優れた気づきを取り上げる授業を実現します。そういうことなら1人1台は多くの子どもの救いになるでしょう。

しかし、懸念されることもあります。最も懸念されるのは、端末機器が画一的に教え込むだけに使われることです。つまり子どもの学びを知識獲得型の孤学にしてしまうことです。そうなれば、探究的学びが影を潜め、正解に性急に走りがちになります。便利さ、わかりやすさは、学びを楽なものにします。しかしそれは子どもの思考力、創造力を封じ込めます。すぐにはわからないからこそ、頭を使って考えるからこそ、学びが生まれるのです。もし、画一的に作成されたデジタル教材が安易に使用されたりすれば、この私の懸念は現実のものとなります。1人1台端末で個に応じた学びといううたい文句はいかにも理想的に聞こえますが、それを単なる孤学にしてしまったらこういうことになるのです。多人数に埋没することはよいことではありませんが、1人になることもよいとは言えないのです。これでは、「個別化」は「最適」とは言えません。

そこで、ふと思うのは、中教審ほどの審議会で私が危惧するようなことに気づいていないはずはないということです。つまり「個別最適化」が考えだされる過程において、1人1台端末を具体的にどう活用するかというシミュレーションはなされているはずだし、「個別最適化」とはとどういうことなのかという議論も尽くされていると考えられます。

後述しますが、学習指導要領で「主体的・対話的で深い学び」が強調されているのです。そのことからして、一人ひとりを切り離した孤独な学習における画一的な知識獲得を「個別化」だとしているとは考えられません。そうではなく、1人1台端末が大勢の仲間や他者とつながっているというICTの機能を活用して「探究的学び」を実現する、そのためのツールをすべての子どもに行き渡らせる、それがGIGAスクール構想だったのではないのでしょうか。

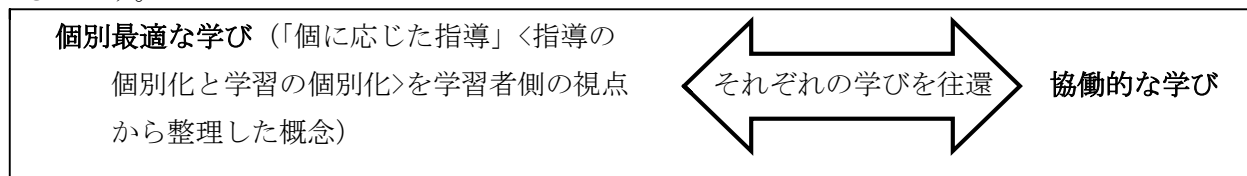
しかし、行われている報道や教育産業のPRを見ると、やはり「個別最適化」という言葉だけが独

り歩きし、デジタル機器で「個別」に学習すれば学力がつくと短絡化しているように思えて仕方ありません。1人1台端末環境でどういう学びを目指すのか、そしてその学びの「最適化」とはどのようなことなのか、誤った情報に流されることなく、子どもたちの教育に携わる教師は、もっとよく考えてみる必要があります。

2 「個と集団、1人と全体のかかわり」という永遠の課題

この「個別最適化」のあり方に対する一つの考え方が、「令和の日本型学校教育の構築を目指して」で示されています。

文科省はこの中間まとめの概要を図表化して公表しています。その最初のほうに「2020年代を通じて実現すべき『令和の日本型教育』の姿」が掲げられていて、その最初に、次のように示されているのです。



もともと文科省は、本年度実施になった学習指導要領において、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業改善をうたっていました。それは、上図における「協働的な学び」と深くかかわることです。

その学習指導要領の実施に入ろうとしていた矢先、コロナ禍に襲われたのです。そして、GIGAスクール構想が前倒しになり、「個別化」が強調されることになったように見えます。しかし、このことにより「主体的・対話的で深い学び」から「個別化」にシフトチェンジしたということではないのです。この学びは、21世紀型学力とまで言われる、時代が求める学びだからです。ですから、この中間まとめにおいても、「協働的な学び」について次のように示されています。

- 教師と児童生徒の関わり合いや児童生徒同士の関わり合いなど様々な場面でのリアルな体験を通じた学びやICTの活用による他の学校の子供たちとの学び合いなど
- 学校ならではの協働的な学び合いや、地域の方々をはじめ多様な他者と協働した探究的な学びなどを通じ、持続可能な社会の創り手として必要な資質・能力を育成

これらの文言は、これまで読んできた「主体的・対話的で深い学び」と相通じるものです。特に協働的な学びが「持続可能な社会の創り手として必要な資質・能力」を育成すると述べられているところはとても大切なところです。それは、他者とかがわって学び、他者とともに取り組むことが社会に出たときの資質・能力として必要不可欠なものだということなのですから。

個別化は、協働的な学び合いを排除するものではなく、往還するものだということだということからすると、個別化による学びが協働的な学びで生き、協働的な学びが個別化による学びを必要とする、つまり、個別に学習する場・協働的に学ぶ場の双方を通して、一人ひとりの能力・特性・個性が尊重され、そのことによってすべての子どもの学びが保障される、そういうものにならなければいけないということになります。

そう考えると、「最適化」とはどのようなことなのかわかってきます。一人ひとりの個別の学習状況や考えを尊重することから始め、学び方においてその子どもの個性が発揮されるようにするとともに、

仲間やさまざまな周りの人たちとの協働的な学びを行うことによって、一人ひとりの学びを最も適正なものにしていくということなのではないでしょうか。決して、「個別」にすること、特に孤学にすることが最適ということではないのです。

もちろん、個々の子どもの能力や特性は大事にされなければなりません。しかし、「個別化」という名のもとに個人の中に封じ込められてはならないのです。そうしてしまうと、それはまかり間違えば差別になります。そうではなく、そのようにして生まれたものが仲間や他者とつながり、そのつながりの中から深まりと広がり生まれる、そういうものでなければならないのです。

この文章を書いている日、「はやぶさ2」から放出されたカプセルが、人類の起源解明につながる可能性のある小惑星「りゅうぐう」の砂を積んで帰還しました。それを成し遂げた科学者たちの姿を目にし、溢れ出る言葉を耳にしたとき、これは人類の叡智と技術の成果であるとともに、この事業を成し遂げた何人もの科学者たちの協働力の成果なのだと思います。

これほどのことでなくても、これからの社会で求められているのは、このような協働力なのではないでしょうか。それは、これからの社会が、やってくる課題に主体的に向き合い、他者と対話しながら、1人では到達できないことを実現していく、そういう協働力が必要とされる社会になると考えられているからです。

個に学びが生まれることは大切なことです。しかし、形式的な個別学習や行き過ぎた個別学習は学びを広がりがない脆弱なものにします。子どもの学びは、一人ひとりの知識や考えが他者とつながることで想像を超え、可能性も超え、学ぶことの真の意味をもたらします。「個別最適化」を単に一人ひとりを別々にして実現するものだと安易にとらえることは慎むべきです。能力や適性の違いがあるからそれぞれの学びが豊かになるのです。1人1台の端末環境はそうした考えのもとに導入されるべきです。

「個と集団」「一人と全体」「国民と国家」といった「1と多」の関係は、いつの世も人々の心をとらえ、惑わせ、平和と争いを繰り返す歴史を繰り返してきたのではないのでしょうか。人は1人で生まれ1人で死んでいく存在です。自分の命は自分にしかありません。それでいて、人は他者とともに生きる存在です。いえ、他者がいなければ生きられない存在です。それは、まさに、中教審の中間まとめが示している「往還する」ということなのではないのでしょうか。そこによりよい往還をつくり出すことが、その人の人生を豊かにするのだと思います。

そういう意味で、中教審の中間まとめが提示した「個別最適な学びと協働的な学びの往還」は、私たちの生きることとつながる、永遠の課題なのだと考えられます。難しいことではあるけれど、個の幸せと集団の豊かさを同時追求することが、私たちがとるべき姿なのではないでしょうか。

象徴的な耳障りのよい言葉はどれも抽象さを含んでいます。だから、その受け止め方はいろいろなるのでしょうか。ここに記したことは、私はこのように考えるという私論に過ぎません。異論もあるでしょう。しかし、一つだけ心から願いたいのは、理念なき「個別最適化」にしてもらいたくないということです。

最後に私見中の私見を申し述べます。

「最適化」は、「個別最適化」ではなく、しいて言えば、「指導の個別化・学習の個性化」と「協働的な学び」との往還による「学びの最適化」なのではないでしょうか。